

## 2017年度 ストックホルム・パリ研修報告書

臨床心理学コース博士課程2年

23-167032 小林良介

今回のストックホルム・パリ研修ではさまざまな学びの機会がありました。まず、ストックホルム初日では、ストックホルム大学・ユヴァスキュラ大学・東京大学におけるそれぞれの教育システムや教育内容、学生の過ごし方などを共有できて、非常に新鮮でした。

2日目は、Globala gymnasiet にお邪魔して、独特な教育システムを紹介してもらい、実際にそこで学ぶ生徒さんとの交流もでき、とても有意義な1日でした。以前、東大付属中高の教育システムについての講演を聞いたことがあり、大学に入る前から研究活動をするという点で共通していると感じました。大学に入る前から研究活動に参加することで、大学選びや専攻選び、ひいては仕事選択について考えられる良い機会であり、高校時代に研究とはどういうものかについて知ることは非常に重要であり、生徒にとってはアドバンテージになると考えられます。また、私たちの関心がLGBT当事者にとって居心地の良い学校風土はどのようなものか、またそれを獲得するにはどのような工夫が必要かというものだったので、その点を生徒さんに質問してみることもできました。その生徒は社会科学ではなく自然科学を勉強している生徒でしたが、「あまり詳しくないが、たとえば友達のあの子はトランスジェンダー。学校でどのようにLGBTやジェンダーについて教えるかは興味深い」という答えが返ってきました。また、学内の図書館や廊下に恋愛やジェンダー、HIVについて相談できる名刺サイズの案内カードも置いてありました。日本の学校ではデリケートだとされてあまりセクシュアリティに関する正確な知識を得たり相談したりする機会が少ないように思いますが、〇〇高校ではオープンにそういった情報が提示されている点で、生徒がリソースにつながりやすいと感じました。

3日目は、「多様性を育む教育」というテーマで行われたさまざまな観点からの研究結果が共有されました。私たちのグループメンバーはみな臨床心理学コースの学生で、教育学部に属していますが教育に関して知らないことも多く、難しい内容も多かったのですが、どの発表も大変興味深く聞かせていただきました。また、私たちは「Difficulties and Needs that LGBT students have in the University of Tokyo :A Qualitative focused-group interview」というタイトルで発表させていただきました。LGBTに関して国によって社会的認知の進み具合や受容の程度が異なる中で、1回の発表の中でうまく伝えることができなかつた部分もありましたが、だからこそ質問をしていただき、そこで意見を深めることができたのが何より有意義でした。北欧諸国のスウェーデンやフィンランドはLGBTに対する理解が進んでいるという考えがありましたが、LGBTに対するスティグマがないわけではなく、その問題点は指摘されていました。また、ベトナム出身の学生からベトナムの大学には学生のユニークさを認める工夫があるということや、同じ日本でも別の大学でLGBTに対して進んだサポートが提供されていることなどを教えていただき、アジアでも

LGBTを含め多様性に関して動いている部分が確実にあるということを感じました。

続いてパリですが、パリ初日は UNESCO に訪問し、UNESCO の教育部門で働かされている方々からお話を聞く機会を持てたことはとても貴重だと感じています。バックグラウンドはさまざまでしたが、お三方ともしっかりとアカデミックな実績があるなかで UNESCO でのお仕事につなげていらっしゃり、現在自分が置かれているアカデミックな世界で確実な実績を残すことが将来につながっていくことを強く感じました。

2日目は OECD に訪問しました。具体的に OECD がどのような仕事をしているのかわからなかった部分が大きかったのですが、実際のプロジェクトを例に説明していただけたため、教育だけではなく幅広い分野で活躍されている方が協働している様子を感じ取れました。

全体を通して感じたことが、まずは教育学研究科の中でも臨床心理学コースにいたため、関連領域として学校現場のことを知ることはあっても、教育のシステムや教育理念などについて知る機会がなかったのも、見慣れなかったり難しかったりしたことも多かったのですが、刺激も多かったように感じます。また、普段行っている心理カウンセリングは1対1での非常に狭いローカルな世界の中で行っていることが多いため、教育全体のお話や、グローバルな視点が得られたことで研究や臨床実践の世界も広がったように感じました。自分がいま1対1の中で、あるいはその周りの小さいコミュニティで行っていることが、何かしらの形でグローバルに還元できるよう、今後も努力していきたいと思えます。